

子供の発達のポイント

0歳から5歳までの
しつけの秘訣



子どもの発達や成長は、当たり前のことを当たり前になれば出来る
そんな時代から、教えてもらう時代になりました。
知っていれば、子育ては楽で上手く行きます。

このプレゼントで、大まかな子どもの成長を把握するだけでも
子育ての見通しが立ち、やるべきことがわかるはずです。
あなたの子育てに、是非お役立てください。

目 次

- 1． 0歳児！ どんな成長の年かな？
- 2． 1歳児！ どんな成長の年かな？
- 3． 2歳児！ どんな成長の年かな？
- 4． 3歳児！ どんな成長の年かな？
- 5． 4歳児！ どんな成長の年かな？
- 6． 5歳児！ どんな成長の年かな？

0歳児！どんな成長の年かな？

【体が出来るよ】

0歳児は、乳児として庇護が必要な状態から、人間として生きる力が培われます。体は、寝たきりの状態から、寝返り、首が座り、一人で座れるようになり、擦り這い、這い這い、つかまり立ち、ひとり立ち、歩き始めと移行していきます。

この時期に一番大切にしたいのが、這い這い（ハイハイ）で生涯を支える体幹を作る事になるので十分に経験する事が大切です。特に親指を使って這い這いする事で、全ての筋肉を使えるようになっていわれています。親指でしっかりと踏ん張る子と膝だけで進む子は、運動神経がやはり違うと見ていて感じる事が多いのでぜひ、親指を使えるようになって欲しいと思います。

ハイハイをしないですぐにつかまり立ちに移行した子やシャフリングベイビーと言われるお尻で移動をする子は、体幹を鍛える時期がないために歩行が始まっても転倒が多かったり、大きくなって腰痛に悩まされたりするので、別個に股関節や体幹を鍛える動きを遊びなどを通じて取り入れていく必要があります。

【食事は大事だよ】

また、身体の筋力が少しずつ上がっていく度に、睡眠も安定してきます。並行して始まるのが、離乳食です。

大体、3ヶ月～6か月の間にスタートさせて1歳～1歳6か月の間に普通の食事が取れるようになっていきます。

この離乳食ですが、順調に進めた場合とそうでない場合は、成長に違いが出てきます。大人が面倒だからとずっと同じものを食べさせたり、授乳だけでいると栄養失調になるだけでなく、発達の遅れにも繋がっていきます。

この時期は、味覚も一緒に培われていくので好むもの嫌がるものが出てきますが、食べさせ続ける事で味や食感に慣れて食べるようになるのも特徴です。その為、保育園の献立は2週間ずつ繰り返す献立となっています。

また、栄養のバランスを考える事も大切です。食べるからといって、特定のメニューや特定の食品になってしまうと栄養の偏りやこだわりを強化することになります。大人は自分の体を維持するだけですが、子どもは体を作っている段階です。大人の食事とは意味合いが変わってきます。発達障害の子は、たんぱく質、鉄、ビタミンBが足りないという研究結果も出ていますので、体の成長と栄養のバランスをみながら適正に段階を進めていきたいですね。

【愛着関係が育つとき】

そして、心の成長は人見知り、後追い等をしてしながら愛着関係を築いていきます。この愛着関係が、上手に構築出来るかによって人を信じる力が培われていきます。信頼関係を築く力は、生涯に渡ってのコミュニケーション能力にも関係する他、この力が育ってないと「何故か、よく騙される」「ダメな人を好きになる」など、人生の大きな岐路でも作用すると言われているので頑張っておきたいですね。では、どうやって愛着関係は構築されていくのでしょうか。

生まれたばかりの赤ちゃんは未熟で自分の身が自分で守れない事を本能で知っています。その為、大人が『安全基地』になる必要があります。『安全基地』は、いつ帰ってきてでも自分を守ってくれると感じられる安全で安心な場所です。大人が『安全基地』になる為にお世話しているだけではダメで、常に見守りつつ必要な時に必要な援助をしてあげることが大切です。それは、子どもの主張を全て受け入れるという事ではなく子どもが『命を預けられる人』と認識してくれる強さも必要となってきます。0歳児の成長は、個人差が大きくて育児書に書いてあるようにはなかなか進みません。お子さんを観察しながら、複雑に絡み合った色々な成長を見極めて段階を進めていくことになります。

子どもへの対応も快・不快から『主体性』や『やるべきこと』を伝えていくに切り替わる1年となります。

例えば、寝せる時はあおむけ寝が基本です。子どもたちは寝返りが出来るようになってうつ伏せを好みますが、これをさせないで泣いてもあおむけ寝をさせる事が命を守る事となります。子どもたちは、泣いてもダメな事があると知ると共に自分の主張が通らない＝自分より強い存在がある事を知り安心するのです。ここが出来ていると子育てがとても楽になります。しかし初めての子育てでは、『どうしたらいいのか』や『タイミング』がわからない事も多いと思います。そんな時、保育園の出番です。ご家庭と保育園でのお子さんの様子を密に話しながら愛着関係作りを進めていけるといいですね。

1歳児！どんな成長の年かな？

【卒乳のタイミング】

1歳児は、心身共に乳児から幼児に移行していく時期です。大きなイベントとして卒乳があります。卒乳は、食事で栄養を取れるようになったら子どもの準備はOK！あとは、お母さんの覚悟が決まったらスタートです。卒乳後の子どもは、睡眠時間と情緒が安定します。物理的に授乳という行為でしか繋がれなかった時期から、見えなくても『大切に特別な人』という心での繋がりが生まれてきます。だいたい1歳半が卒乳するのに良いタイミングと言われています。長く授乳している子は、心の繋がりが理解しにくいと不安定になりやすく、また授乳があると食事がしっかりと取れなかったり睡眠が小刻みになってしまったり生活リズムも安定しません。その上、長くなればなるほど変化する事を嫌がり乳を求めて大泣きする日数が伸びて大変になるようです。卒乳を保護者が決めたらどんなに泣いてもやり通す事が大切です。だいたい3日くらい飲まずに過ごせれば欲しがらなくなっています。母乳からミルク（フォローアップ）に変えたのは卒乳とは言いません。もし体重が軽くて医師からの指示がある場合は飲み続ける事になりますが、その時は食後にコップで飲むようにしましょう。

卒乳直後の注意事項としては、ストローはしばらくの間使わない事です。卒乳すると舌の動きが前後運動から左右運動に切り替わります。その時にストローを使うと舌が前後運動から切り替わらず咀嚼の際がうまくいかない事があります。食べる事が上手に出来ない食事と苦痛な時間になりますので気を付けてあげたいですね。

【ジブンデが始まったら躰のスタート】

1歳児は、自分と他人の区別が出来ない状態から自分というものが出てきます。「自分で、自分で」と出来ないのに言い張るのもこの時期です。見守りながら出来ない所をさりげなく手伝って自分で出来た！という達成感を体験させてあげましょう。

自己が生まれますが、まだ言葉は未熟で語彙力がありません。気持ちを相手に伝える手段として、噛みつきたり、引っ掻いたり、押し倒したり、頭突きをしたりと自分の使える所を使って表現します。親が、攻撃を受けた時にニコニコと「駄目よ」と注意したことにより噛みつき等の攻撃が相手が喜ぶコミュニケーションだと勘違いするものもこの頃です。お友達に攻撃しない子にする為には、この時期からしっかりとやって欲しくない行動の際は、叱るという躰をスタートする時期でもあります。

躰に際して、重要な事は親の意識です。今は『褒めて育てる』という情報が育児として主流ですが、これは叱らないという意味ではありません。以前の日本の育児は、他人に迷惑をかけないようにきちんと悪い事は叱ってましたが、褒める事がとても少なかったのが、今『褒める事』がピックアップされている状況です。赤ちゃんは、泣くことで快・不快を伝えてきます。そうすると大人は、声をかけ不快を取り除くのがお世話です。それを大きくなくてもそのままにしていると赤ちゃんの時に学んだ泣くと思いが伝わるというのをそのまま再現し、大人が対応できない事でも思い通りにする為に大声で泣いたり、しつこく泣いたりします。ここで親が負けて、要求を呑むと子どもの心の中は、泣けばやっぱりどうにかなるんだ！という気持ちが『強化』されて次は、更に泣き方がエスカレートします。ですので、ダメな時は子どもがどんなに泣いても要求をきかない態度がとても大切です。

【子ども同士の喧嘩と小さなケガは学び】

歩行が上手になったり、ジブンデが出てくると多くなるのが、転倒や打撲などの小さい怪我です。この怪我は、子ども達が自分の体を知ったり上手に使えるようになったりする際にとても大切です。また、探求心旺盛な子ほど多くなる傾向があります因果関係の理解も怪我を通して習得する事が多いので大切な経験として考えましょう。そして、自分の気持ちが出てきますが相手にも気持ちがあることに気が付いていないので突然他の子が持っているものを取ったり、取られそうになったら自分の一番筋力が発達しているところ（口や手）を使って阻止しようとします。子どもたちは、悪気も相手を悪く思う気持ちもありません。ここでは、楽しく関わるために基本的な会話の言葉や叩いたり噛んだりすると痛いからしてはいけない事を学びます。ここでしっかり学ぶことで友達が出来る3歳以降の関係性の築き方が変わってきます。そして、互いが気になるからこそケンカをします。だから、トラブルが全くなかった子は仲が良いお友達がいなかったかもしれないのです。

【テレビや動画は出来れば見せない】

またこの時期は、手がかかるのでテレビや動画に子守をさせがちです。子どもは、おとなしく静かにしてしてくれますが、その時間が蓄積されるほど発達の遅れに繋がっていくことが多いです。教育番組や子供向けの番組ならと思いますが、脳にとってはどれも一方的な音でしかありません。テレビや動画を見すぎると自閉症の特徴と似た様子をみせるようになります。社会性の困難・コミュニケーションの困難・言葉の遅れ・運動機能の障害が特に顕著に表れがちです。脳を作っている時期なので、そのまま特徴が固定され就学前健診などで自閉症の傾向を指摘されることもあります。

特に言語の獲得時期には、『会話』がとても大切で歌やメディアでは語彙は増えても意味がわからず、使い方もわからない様子をみせますので、「あれ？」と思ったときやどのようにテレビや動画を見ずに子どもと過ごせばいいのか迷ったときはいつでも保育園にご相談ください。



2歳児！どんな成長の年かな？

【トイレトレーニングのスタート】

2歳児は、乳児期から幼児期に移行する重要な時期です。身辺自立の大きなイベントとして、排泄の自立があります。オムツからパンツへの移行は、年齢になったから出来るものではなく膀胱がおしっこを溜めておける筋力とそれを感じ取る神経機能が整ったらスタートです。だいたい2歳半から3歳にかけて整う事が多いのですが、それまでの生活によっては遅れる事もあります。目安としては、2時間くらいオムツが濡れていない状態が続く事です。昔は1歳児から始めていましたが、筋力が足りずに結果『ちょっぴり漏れる』を繰り返し本人の自信喪失に繋がるようなので、しっかり身体が出来てから進めるのが主流になっています。しかし、トイレトレーニングはトイレに座る事から始めます。これは1歳児クラスで歩行が安定すると開始し、トイレに定期的に座らせて排泄時の感覚を感じる事を目的としています。

【自我の芽生え】

2歳児の最も大切な成長に自我の芽生え（イヤイヤ期）があります。これは、1歳児クラスで始まった『ジブンデ』の進化系で、一人の人間として踏み出した証拠でもあります。

この時期は、理解力と言語が発達し子どもの中では『一人前』になったつもりでいます。しかし、まだまだ自分で完結出来る事は少なく、思いと出来る事の狭間でイライラし時にはパニックになり『すべてがイヤ』になってしまう事があります。しかし、これはとても大切に心が育ってきて『自分』という存在に気が付き『自分はどうかしたいか』『自分の気持ちを大切にしたい』『自分の気持ちを大切にしたい』という気持ちが出てきているからです。

ここで大人が赤ちゃんの時のように理由も告げず「あれします、これします」というと、何だか自分を大切にされていない気がして複雑な思いはあるものの、言葉は上手く選べないので「い～や～」となってしまう。また、「い～や～」を連発しているうちに自分自身が何をやりたかったのかわからなくなり「い～や～」のパニックになっている事も少なくありません。

色々わかるようになったとはいえ、まだまだ乳児からやっと卒業しようとしている子どもたちですが、この『イヤイヤ期』に大人も子どもも沢山の学ぶことがあります。

①イヤイヤと言ってごねても大体の場合は思い通りになりません。そこで、子どもたちは『気持ちを切り替えること』や『どうすれば自分の意思がわかってもらえるか』を学んでいきます。

②子どもが『どうすれば自分の意思がわかってもらえるか』を考えるというのは、躰としてはすごいチャンスです。ここで、まず「人の話を聞く」という姿勢を作りましょう。『自分が困っている時に人の話を聞くと上手くいく』という事を強化するのです。泣けば大人が自分の思い通りになると思っている状態な子どもはイヤイヤは酷く出がちです。そう思っているのは、今までの大人の態度ですからグッと我慢して丁寧に話を聞くように伝えましょう。

③大人がきちんと子どもに向き合って話して聞かせる事で「大人が困る事をして気を引く」ということも減ってきます。子どもは何でもいうことを聞いてくれる人は本能的に自分より弱いと判断しますので、ここで自分を守ってくれる強い存在だとわかってもらえる事はとても大切です。イヤイヤ期は、大人が勝つか子どもが勝つかの綱引き状態、子どもが勝ってしまうと今後の子育てがとても大変になってきますので、是非ここで大人が勝って子どもの信頼と尊敬を勝ち取って欲しいと思います。

子ども達に話して聞かせるポイントをここでお話ししておきます。

○子どもが理解出来る言葉で伝える。

○大切な事は最初と最後に入れ、話が長ならないようにする。

○話を聞いてもらうのに条件を出さない（やってくれたら○○する。○○あげる等）

○自分でやろうとしている時は出来るだけ待ってあげるが、時間がないときは「ここまでお願いできる？」というお願い形式で話す。

○やるかやらないかで話さない。やる事は前提で、やるための選択肢を提示する。

（散歩に行くか行かないか。ではなく、散歩に行くから○○公園にするか××公園にするか等）

○話を聞いてくれたら必ず「感謝の気持ちを伝える」

これだけでずいぶん変わってきますよ！

それでも困った時は、たくさんの引出しを園では持っていますのでご相談くださいね。

その子にあったカスタマイズで対応を一緒に考えていきたいと思います。



次は3歳児！どんな成長の年かな？

【身辺自立が終わる時】

3～5歳児で、幼児期から児童に移行していきますが、そのスタートの時期です。3歳児は、まず幼児期の仕上げとして身の回りの自立（排泄・着脱・食事）を完成していきます。この時期に丁寧に生活習慣を身に着ける事が、生涯にわたってのその子の財産となります。手洗いや歯磨き、お風呂の入り方などもこの時期に教えてもらった事を一生続けていくと言ってもいいでしょう。特にトイレの使用方法は、以降個室の出来事になるので気をつけましょう。特に排便の拭き方は、この時期以降誰にも教えて貰えない為トイレットペーパーを大量に使ってしまったり、流してしまうために健康状態に気が付きにくくなってしまいますので注意が必要です。

【容易に育て直しが出来るボーダーライン】

3歳までは、人格の基礎を作ってきましたが3歳以降は性格や社会性、善悪の判断等の『人として』の常識を学んでいく時期です。教えても覚えませんが、親の姿をみていつの間にか学んでいると感じるでしょう。交通ルールを守る子、守らない子。悪いことを人のせいにする子、しない子。失敗を乗り越える子、挑戦しなくなる子等この時期からの周りの大人の態度や関りがそのまま反映されていきます。何事も初めてが大切です。1度覚えてしまうと、修正するには時間と労力が必要となりますので、子どもになって欲しい姿の行動を大人が見本を見せるのが大切です。とは言え、まだ脳の刈込が終わってない時期なのでこの時期でしたら修正も可能です。親として過保護になり過ぎた、厳しくなり過ぎた、コミュニケーションが足りなかったなど反省してやり直しが効きやすい最後の年とも言えます。もすこ自分の子どもがどういう状態にあるのか、色眼鏡をかけずにしっかりと受け止めるのが辛いかもしれませんが大切なことです。

【嘘つきの3歳児と言われる理由】

また、3歳児の特徴として『嘘つきの3歳児』と言われることがあります。まだ乳児を引きずっている状態なので現実と想像の世界の線引きが曖昧です。『そうだったらいいのにな』が「やったこと」として言葉にすることが多々あるのと、知恵が付き保身の為の嘘も言うようになるからです。想像力による『現実と違う』と『嘘』が大人には分かりにくく翻弄されるがありますが、こういう時期なので子どもの言う事を全て信じる事はしないでおきましょう。成長と共に改善されていきますが、例えば『保育園に行きたくない』と子どもが思った時に「お友達が虐める」「先生が怖い」等と言う事がよくあります。親としては心配ですが、子どもや園の様子をよく見れば事実かどうかはわかると思います。この発言は、今まで子どもがどのような事を言ったときに親が反応してくれたかの学びから来ています。マイナスな事に反応しやすい親のお子さんは話を聞いて貰うためにマイナスの事をいうようになります。事実でない場合親が「そんな事はない」という態度を毅然と取る事で子どもは『事実と違う事を言っても信じて貰えない』という事を学ぶと共に親の姿から他人を信じる心を学んでいきます。

【社会性が育ち始める】

また、友達との関りで『仲良しグループ』が少しずつ出来始める反面、競争意識も育ち「1番じゃなきゃイヤ」や「負けるのがイヤ」といった気持ちが強くあらわれてきます。この気持ちはとても大切ですが、行き過ぎると友達と仲良く出来ずコミュニケーションが下手な子になったり、負けるのが嫌で物事に挑戦しなくなったりします。人生、上手くいかない事があるものです。その際に、落ち込んで立ち直る力を『レジリエンス』と言いますが、何度も経験しながら強くなる力なのでこの時期に負けたり勝ったりする事や、思い通りにならない事、失敗してもやり直せばいい事をしっかりと学ばせることが将来の自殺や引きこもり、コミュ障を防いでいくと言われています。レジリエンスを強くする事は、ストレス耐性も強くなりますが、負ける事だけでなく最後には、勝ったりやり遂げる成功体験をする事で、自信（自己肯定感や主体性、向上心）に繋がっていきます。3歳児は、外の世界と少しずつ繋がりがながら人生を生きやすくするか、そうでないかを決める大切な時期なのです。

【三つ子の魂百まで】

また、3歳児健診で発達障害の認定や療育などを勧められることがあるのもこの時期です。現在、発達障害や療育に行くお子さんは、本人の脳の発達の凸凹だけでないことが最近わかってきています。遅く寝るような生活リズムが整っていない子どもや親に愛されている実感がない子も発達障害のような状態になる事がわかってきましたので、療育に行っても改善されなかったりする場合は、併せて考えていくことが重要で、昔の人が『三つ子の魂百まで』と言っていますが、これが本当たということが脳科学的にも証明されつつあり、一生変わらない考え方の方向性が決まるので人間として大切なスタートの時期とも言えます。



次は4歳児！どんな成長の年かな？

【認知能力が育つ年】

4歳児の1年間は、乳児期と違い目に見える変化が少ない年となりますが、成長がないかと言えばそうではありません。子どもたちはこの時期に社会性と共に時間・空間・自他などの認知やコミュニケーションがなどを学んでいく云わば『心が育つ年』になります。しかし、心が育つためには、小さい頃からの積み重ねが大切で特に感情のコントロールは十分に愛情を感じ取り、愛着を形成出来てないと上手く育つ事が出来ません。感情のコントロールは、幼いままで止まってしまうと将来的にパーソナリティ障害（〇〇人格障害）に繋がってしまいやすいので上手く育てない時は、育て直しが必要となってきます。ただ、ここでは順調に育っていたらどのような年になるのかをお話していきたいと思います。

【善悪の判断が芽生える】

3歳児から始まる『いいつけ』これが善悪の判断の芽生えになりますが、そこが育ってくると『これは良いことか？悪いことか？』と考えようになります。モラルを教えるのに良い時期ですが、ここで大人が悪い見本を見せてしまうと『人が見ていなければいい』『自分が困らなければいい』など覚えてしまい、モラルが低い人間性に育ってしまう可能性が出てきますので気を付けましょう。また、『これは嫌い（苦手）だけど、〇〇の為にやった方がいいかも』と理由づけで良いことをしようとする姿が見られるようになります。お子さんの頑張りをしっかり和観察し、認めてあげることで『やった方がいいかも』が、『やるべき』に変化していきます。この正しいことを認めることを繰り返すことで、子ども達の『かもしれない』が確実にっていくのを強化といいます。強化の考え方はしつけに有効な方法ですが、間違ったことを繰り返す事で強化されていくので大人の対応は気をつけなければいけません。

【時間の観念が芽生える】

3歳児の頃は過去・現在・未来が曖昧で、時間がはっきりとわかりませんでしたが4歳児では理解が進みます。今がわかるようになり、昨日と明日も区別がつくようになります。それに伴い時計に興味を持つようになります。時計を読むことによって、約束事が明確になり『いつまでに、どうする』などの見通しを持った計画も大まかではありますが出来るようになります。前出の『善悪の判断』と合わせて『約束を守ること』を学ぶ時期でもあるので、是非約束を子どもと共に考え（大人が一方向的に押し付けるのはNG）約束を守れた達成感をたくさん感じさせてあげてください。

【相手の気持ちに気がつく】

「おまえのモノは俺のモノ、俺のモノは俺のモノ」このジャイアンの名台詞ですが、これは3歳児までの子どもの感覚を表すのにぴったりです。4歳児になると「俺」と「おまえ」が違う事に気が付きます。自分の考えと違う考えがあり、自分の行動で相手が良く思ったり悪く思ったりすることがわかるようになります。そこに気が付くことで、コミュニケーション能力がグッと上昇します。そして、友だちという意識が芽生え興味関心が自分が楽しいことから友だちと楽しいことに移行していきます。その分、喧嘩も増えますが大人が介入して解決してしまうのではなく、子ども同士で解決出来るように考え方を導いてあげることが大切です。間違っても大人が喧嘩相手に「謝れ」なんて言わないようにしましょう。子ども達は、仲がいいからこそ喧嘩をするので大人が友だちを作る機会を壊してしまうことになります。そして子ども達が友だちを作るうえで大人がやってはいけない事に「決めつけ」があります。『この子は、こうだから友だちになってはいけない。』『この子は、こうだから友だちになって欲しい。』など大人の物差しで子どもに強制することは、自分で考える力を奪うばかりか、差別意識を植え付けることになります。昔の人は『類は友を呼ぶ』とよく言ったものです。子どもの友達を親が選ぶのではなく、良い友達が周りに集うように育ててあげることが大事ですね。

【身体の機能が整う】

4歳児になると、様々な身体機能が整います。体も複雑な動きが同時に出来るようになり、思った通りの動きも練習する事で出来るようになります。危険察知能力もあがり、『これは危ないから辞めておこう』と好奇心よりも自制心で動くことが出来るようになります。言語も巧みになり、様々な言葉を使うようになります。言葉あそび（しりとり・逆さことば・反対言葉など）を沢山取り入れることで、親子のコミュニケーションと言語能力の獲得が見込まれます。また、園であった事を親が尋ねて沢山アウトプットさせることが訓練となり、聞いて貰いたいという気持ちから覚える事が増えるので『ワーキングメモリ』を育てる助けになります。たくさん話すことが出来るようになると汚い言葉も楽しんで使うようになります。この汚い言葉（死ね・うんち・嫌い・・・等）に大人が反応すると、更にエスカレートしていくので、過剰反応しないで「そんな言葉は使わないで欲しい」と淡々と伝える。しつこい場合には、一旦無反応になるのもいいでしょう。子どもが使うのを止めたら「わかってくれて嬉しい」と必ず伝えてください。

【4歳の壁とは】

子どもが様々な事がわかるようになってきて、正しいこともわかるようになってはきたけれど、時折上手くいかないことに癇癪を起したり、親をコントロール出来るか試したり、甘えなくなったり自立したい気持ちもあって葛藤する姿が大人から見たら理解しにくい難しい年齢に感じる状態の事です。徐々に抜けていきますのでほんとと構えて二宮尊徳の教えを実行してみるといいでしょう。

『可愛くば、5つ教えて、3つ褒め、2つ叱って良き人とせよ』

今後の子育てにもずっと役に立つ素敵な格言ですよ。

次は5歳児！どんな成長の年かな？

【就学に向けて】

5歳児は、小学校の進学に向けて準備する年になります。進学先の状況に応じて保育者は、子ども達が困らないように保育を組み立てていきます。どの小学校にいくとしても、生活リズムが整う事、午睡をしないで生活できる事、一定時間座って話を聞けることが普通学級では必要とってきます。最近では、養護学校に行ったり、普通クラスに所属しながら苦手な時間を特別支援してもらったりする選択肢も増えてきています。保育園で加配が必要なお子さんは、養護学校を選ぶことも視野にいれましょう。将来を長い目で見た場合、現在大企業は障害者雇用が必須となっている都合上、普通学校で出来ないことが多い子よりも養護学校でリーダーシップを取れる子が就職できる傾向にあるようです。普通学校に何がなんでもと進学し、他の子と比べられ自己肯定感を下げてしまい『自分はダメだ』と更に自信を無くす子も多くいるので、先の未来まで考えて『その子に合った』選択肢を考えておきたいですね。

この後は、普通学校に進む平均的な5歳児の発達をお話していきます。

【自己有用感を育てる】

5歳児になると様々な特別な経験が出来るように保育者は保育を考えますが、その中で必ず取り入れるのが『リーダーシップ』の経験です。保育の中にも子ども達の意見を取り入れ、園運営にも一部参加するような経験もしていきます。活動として小さい子のお世話や園内のお掃除など、出来るだけ子ども達から『こうしてあげたい』という気持ちを引き出し、**自己有用感**を育てていきます。自己有用感とは『自分は人の役に立っている』という気持ちです。自己肯定感は『自分はこれでいい』という気持ちになりますが、どちらも生きていく中で大切なのでしっかりと育ててあげたいですね。

【これまでの経験が活かされる協同性】

3歳～5歳の間に『自分の考え』＝『他人の考え』だと思っていたのが、自分と他人は考えも出来る事も違うことに気が付きます。3歳児くらいまで自分は何でも出来るという万能感がありますが、4歳児くらいにはそれぞれに得意不得意がある事を学び、5歳児では誰が何をすると物事がスムーズに進むのか考えられるようになり役割分担の適材適所が出来るようになっていきます。また、4歳児では対1の思いを受け止めるだけでしたが、5歳児になるとグループの中での話し合いや計画から達成までのスケジュール管理が出来るようになってきます。これを『協同性』といいます。協同性は年齢で出来るようになるのではなく、これまでの体験を通して十分に能力が育った時に出来るようになります。

【認知能力・非認知能力】

子ども達が幸せな人生を歩いて行って欲しいと誰しも願うことですが、幸せになるには『幸せと感じられる力が必要』だと言われています。高学歴、高収入でも幸せな人生と感じられない人がいる反面、小さなことで幸せだと感じられる人がいます。この違いを感じられる能力が、**非認知能力**と言われ幼児期では、**好奇心・自制心・協調性・忍耐力・やりぬく力・思いやり・自尊心**などです。これは**基本的な人格形成に大切な能力**で、認知能力（IQや学力）は後でも育つが非認知能力は乳幼児期にしか育たないと言われています。非認知能力が高いと、早期教育を行った子どもより認知能力が最終的には高くなると言われていますので、乳幼児期は非認知能力を育てるのに力を入れて行きたいですね。特に、5歳児で気を付けなければいけないのは『嘘』です。知恵が付き、言葉が巧みになってくると自分に都合の悪いことから回避するために、人のせいに見えたり、病気の振りをしてみたりと様々な言い訳を考えます。ここでしっかりと注意をされないと『嘘』を付くことが日常化し、習慣になり、性格になっていきます。性格になってしまうと生涯に渡って『なぜ、自分は本当の事が言えないのか、信用されないのか』と悩むことになりますので、きちんと直していきたいですね。

【幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿】

子ども達は5歳児になるまでの6年を通して、就学準備をしていきますが、その指針として『幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿』があります。『①健康な心と体 ②自立心 ③協同性 ④道徳性・規範意識の芽生え ⑤社会生活と関わり ⑥思考力の芽生え ⑦自然との関わり・生命尊重 ⑧量・図形、文字等への関心・感覚 ⑨言葉による伝え合い ⑩豊かな感性と表現』

この姿は目的ではなく目標とされており、出来るだけこのような姿が見られるように保育を行うとなっています。園によって体験のさせ方は様々ですが、教え込むのではなく体験を通じて学んでいく姿勢というのを目指しています。しかし、子ども達の姿は保育園だけで培われるものではなく、ご家庭との協力のもとに実現されるのです

【小学校へ行くにあたって理解しておくこと】

保育園は、子どもの養護が目的の施設なので『親のように』一人ひとりを大切にしていますが、小学校は教育機関なのでみんなで一緒にが大切になってきます。保護者の方が、保育園と同じことを学校に要望しても通らないことを知っておきましょう。また、起立性調節障害の子どもが増えていきます。診断されると、学校では学習よりも無理をさせない事を優先させることになります。学習は二の次になり、勉強は保護者がフォローをしていかないと遅れていく事になります。この障害は、乳幼児期に遅く寝る習慣がホルモンや体内時計に影響を与えてしまった結果です。一生を左右することもありますので、生活リズムを小学校に合わせて園にいる間に整えていしましょう。

いかがでしたか？

子どもの発達には、個人差があるので当てはまらない場合もあるかもしれません。ただ、当てはまらない場合は、発達の遅れや問題があるかもしれませんので、お子さんを注意してみていくことが大切です。もし、子育てに自信がない人がいたら、プロがお子さんの発達を定期的に確認してアドバイスをしていくサービスがあります。大切なお子さんの成長の保険として受けてみたい方は、LINEでご相談ください。

子どもの発達のポイント：0歳から5歳のしつけの秘訣

著作者名 祝吉 美紀

発行元 Happy.Child-Project

製作日 2023年9月

著作権者表示 ©miki.iwayoshi

はっぴーちゃいんど☆プロジェクト

